

昭和四十六年度

秋季公開講演会要旨

ハイデッガーにおける

「聖なるもの」について

本学教授
文学博士

木 場 深 定

ハイデッガーの著作の全体を通して極めて一般的に言えることは、その哲学思想は無神論的であるように見なされそうだとしたこと、或いは、そのように見なされがちだということである。そのためにハイデッガーが「神なきキェルケゴール」と評され、或いはその哲学を「無神の哲学」として性格づけられたのは理由なきことではない。しかしハイデッガーの哲学は、謂わゆる有神論ではないが、また普通に言われる無神論と見られるべきでもないであろう。ハイデッガー自身も、存在の真理を指向する彼の思想は決して有神論に加担するものでなく、それは有神論的でないと同様に無神論的でもない、と言っているからである。それにしても、少なくとも直接には神について語らないハイデッガーの哲学は、それにも拘わらず、或いはむしろ、それ故にこそ、却ってその思想表現の隠微の裡に、例えばヤスパーズの言う「哲学的信仰」などよりも遙かに深い隠された宗教的バトスを秘めているもののようにも思われる。ハイデッガーの思想において何らかの意

味で宗教的なものを嗅ぎつけ、乃至は「聖なるもの」を探り求めようとする試みは、彼の思想に関心を寄せる限り、恐らく何人にも避けがたい誘いなのではなからうかと思う。

ハイデッガーの論文『世界像の時代』は、近代的世界像の形而上学基礎を剔抉することを主題としたものであるが、この論文の始めの部分において、彼は近代を特徴づける本質的な現象として、先ず「科学」を、次に「機械技術」を挙げ、更に近代においては「芸術」が人間の生の表現と見なされること、また人間行為が「文化」として把握され育成されることを指摘し、最後に「神々の脱去」という現象について述べている。

改めてハイデッガーに聞くまでもなく、極めて一般的な意味においても、近代は「科学の時代」であり、殊に今日は「科学技術」の驚異的な威力が喧伝せられ、更に最近ではその利害、特に公衆に及ぼす害毒が種々と論議せられつつある時代である。ハイデッガーによれば、近代の人間は結局、技術の使役人と成り果て、技術によって機能化された人間である。この意味で技術は確かに一つの「危険」であり、ここでは人間はその本質を喪失し、更に根本的には「存在忘却」のうちに陥っている。

このように技術によって徹底的に支配され、存在忘却に陥った時代は、同時にまた神および神々を喪失した時代である。即ち「神々の脱去」ということが近代、乃至は現代を特色づける本質的な現象であると見られる。もっともハイデッガーがここに「神の脱去」と言うのは、単に神々を除籍すること、神々を否定することではなく、従ってそれは謂わゆる「無神論」といった大雑

把な意味に解せられてはならない。ハイデッガーによれば、「神の脱去」というのは、神および神々に関して決定を欠く状態を意味するのであって、それは宗教性を排除するものではなく、却って神々への関係を宗教的体験に変える所以のものである。しかしとにかく、今や神々は逃げ去ってしまい、ヘルダーリンが歌ったように、「我々の来たのはすでに遅かった」のである。神々の日はすでに暮れて世界は夜となった。我々の時代は「世界の夜」の時代であり、ヘルダーリンの表現によれば、「乏しき時代」である。それでは、この「世界の夜」の時代、この「乏しき時代」にあつて、殆んど消え去ったかに見える神性の足跡を感じし、「聖なるもの」を予感するのは誰であるか。ハイデッガーはそこに詩人の使命を見るのである。

「さながら祭の日の如くに……」という句で始まるヘルダーリンの詩の解釈において、ハイデッガーは「聖なるもの」について言及する。ヘルダーリンのこの詩において「聖なるもの」と名づけられているのは「自然」であるが、この「自然」はあらゆるもののうちに「不可思議に遍在」しており、すべての現実的なもののうちに現存し、謂わば滲透している。ヘルダーリンの表現によれば、「自然」は「軽やかに抱擁して育む」のである。

ヘルダーリンがこの詩のうちに、「自然」と呼ぶものは、ハイデッガーの言う「存在」に照応するものと考えてよいと思われるが、彼はこの「自然」の意味を更に規定して、後代において「自然」と呼ばれるものはギリシャ語の「ヒュシス」に当たり、この「ヒュシス」を「自然」と翻訳することがすでに原初的なものの

歪曲である、と言う。由来、「ヒュシス」とは「生じること」、であり、最も根源的な意味では、「現われ出ること」、「開け出ること」である。一般に或るものが開けた明さのうちへ立ち現われて、自らをその「形相」^{フォルム}において呈示することであり、あらゆるものはこのようにしてその都度、個々のものとして現存することが出来る。従つて、根源的な意味における「ヒュシス」は、謂わゆる自然的なものとともに歴史的、精神的なものをも含むほど広い意味に取られていたのであつて、我々はこれを今日の謂わゆる自然と歴史とを越えて包む存在そのものの生起と解してよいであろう。

ヘルダーリンは「さながら祭の日の如くに……」の第三節で、「しかし夜が明ける。私は待ち焦れ、夜明けを見た。そして私が見たもの、聖なるものが私の言葉である」と歌っている。ヘルダーリンはこの「世界の夜」の夜明け、この到来する自然を「聖なるもの」と名づけるのである。即ち、「自然」はその到来によって、自らの本質を「聖なるもの」として顕わにするわけになる。この抄録では、ハイデッガーの解釈についてこれ以上に縷説することをしないが、この「自然」の到来は、結局、ハイデッガーの言う時間性または根源的時間の時熟の思想に繋がるものと考えられよう。

由来、ドイツ語の *heilig* は英語の *holy* に当たり、それはもと *whole* であること、即ち損傷されない無疵の全きもの、健全なものを意味した。「自然」はこの意味における *das Heilige* 謂わゆる「聖なるもの」としてその意味を顕わにする。そしてこの「聖

なる自然」はその到来によってあらゆるものの損傷を癒し、それを原初の全き姿に回復させる。しかしあらゆるものを癒し、それに救いを齎らす「聖なる自然」は直接には近づきたいものであるが、それにも拘わらず、詩人はそれに抱かれ育まれつつその到来を予め感じ取っている。詩人における「聖なるもの」のこの予感、*「世界の夜」*の夜明けの曙光とも言うべきものである。それでヘルダーリンは「しかし今しも夜が明ける」と歌うのだ、とハイデッガーは解釈するのである。

要するに、ハイデッガーはヘルダーリンの解釈に事寄せて、自らも「聖なるもの」において「逃亡した神々の足跡」を探ろうとして思索する。ハイデッガーの思索は、結局「存在」に寄せた思惟であり、「存在の真理」を指向する思惟である。従ってハイデッガーは、「存在の真理」から始めて「聖なるもの」の本質が考えられ、そして「聖なるもの」の本質から始めて「神性」の本質が考えられると言ひ、更に「神性」の本質の光において始めて「神」という言葉で名づけらるべきものが考えられ、また語られる、と述べている。因みに、ヤスバースとハイデッガーのとを対照すると、ヤスバースの哲学体系は、流動し動揺してはいるが、原理的には完結したものと見てよい。これに對して、ハイデッガーの思惟は常に決定的な立言への途上にあつて、いつも未解決の緊張とも言うべきものを残している。今の場合、謂わゆる神の存在または非存在について云々することも、ハイデッガーの根本的立場からすれば、単に性急にすぎるばかりでなく、また誤った態度でさえある。究極において「存在の真理」を指向するハ

イデッガーの思惟は、思惟としての思惟、即ち「存在の真理」によつて定められた限界を尊重するが故に、遽かに謂わゆる無神論にも組せず、さりとて有神論にも組しない。このことは決して神または宗教的なものについてのハイデッガーの無関心を示すものと解すべきではなく、むしろ「存在」を「存在するもの」から峻別し、ひたすら「存在」の真理を追求する彼の根本的立場、即ち存在論的立場から来ているものと考えらるべきであろう。とにかく、人々はハイデッガーが少なくとも直接には神について積極的にも消極的にも決定的な述定をしないその思想表現の機微の間にこそ、却つてハイデッガーに独自の隠された宗教的バトスの隠頭を窺うべきであろう。

(付言) 昨一九七〇年に『現象学と神学』という著作が公にされた。ハイデッガーはそこで、「神学は一個の実証的な学であり、従つて哲学とは絶対的に異なる」というテーゼを掲げている。神学は哲学に導かれて神を語るのではない。このように神学に対して哲学がその存在論的基礎づけをなしえないところに、他の実証科学とは区別される神学の特異性がある。——以上のような趣旨のことを述べているが、ここではそれに立ち入らない。